

近代英国の音楽療法

重 永 洋 子

The Music Therapy in Modern Britain

Hiroko Shigenaga

はじめに

1969年、英国音楽療法の創始者、J. アルヴァンの来日は大変意義深いものであった。これをきっかけとして、眠りを覚まされた日本の音楽療法の着実な歩みを受け、2001年の「日本音楽療法学会」の結成までのめざましい発展を見るのである。

そこで音楽療法の先進国である英国において、J. アルヴァンが BSMT を創設して以来、どのような歩みを経て、1999年の音楽療法士の国家登録認定までの発展をしてきたのか、現在のイギリスの音楽療法の姿はどのようなものか、音楽療法という職業はその歴史が浅い分野だけに、それを職業とすることに伴う問題が生じてきているのではなかろうか、そして今後音楽療法の将来に向けてどのような努力がなされるべきであろうか、これらの点を中心に英国の音楽療法について考察し、今後の我国の音楽療法の発展を考える参考としたい。

I 英国における近代音楽療法の発展

音楽は太古の昔から、我々の生活の中に「癒し」として存在していたが、いわゆる今日いう近代音楽療法は1940年代のアメリカにおいて、第二次世界大戦を契機として始まったとされている。多くの帰還兵は医学的治療だけでは癒されず、音楽による治療によって少しずつ立ち直ることが確認された。

当時すでに英国においても、様々な障害を持つ人への音楽を活用した取り組みが始まっていた。英国における近代音楽療法の先駆者は、BSMT（英国音楽療法協会）の創立者 J. アルヴァン（1897—1982）である。1958年の BSMT の設立により、音楽療法という新分野が病院という閉鎖社会を出て、広く社会に影響力を持ち始めたのである。¹⁾

H. タイラーは近年の英国の音楽療法史での特筆すべき出来事として次のような一覧表を提示している。²⁾

- 1958年 音楽療法治療音楽協会（Society for Music Therapy and Remedial Music）の設立。1967年、英国音楽療法協会（The British Society for Music Therapy: BSMT）と改称。
- 1968年 ロンドン・ギルドホール音楽演劇大学（Guildhall School of Music and Drama, London）において、J. アルヴァンによる音楽療法課程の創設。現在、ヨーク大学の認定を受けている。
- 1974年 南ロンドン・ゴルディレイ病院（Goldie Leigh Hospital, Surrey）において、P. ノードフと C. ロビンスによる音楽療法課程の開始（現ノードフ・ロビンス音楽療法セン

ター)。1984年よりロンドン・シティ大学の認定を受けている。

1976年 職業音楽療法士協会 (Association of Professional Music Therapists: APMT) 設立

1980年 ロンドン・シティ大学に Research Fellowship 設立。

サウスランド・カレッジ (現ローハンプトン大学) において、E. ストリーターによる音楽療法課程の新設。

1991年 ブリストル大学に最初のパートタイムコース。

1994年 アングリア・ポリテクニク大学に最初の MA コース。

1996年* 音楽療法の国家登録 (State Registration) 取得。

1997年 ウェールズ音楽演劇カレッジに音楽療法課程の新設。

*(筆者註 1999年の誤り)

上記の事項を中心として英国の音楽療法の発展の軌跡をたどってみる。

1. 音楽療法治療音楽協会の設立

1958年、英国初の音楽療法組織、音楽療法治療音楽協会 (1967年、英国音楽療法協会: BSMT と改称) が J. アルヴァンによって設立された。

この協会は年2回、ニュース冊子を発行し、これが専門誌 Journal of British Music Therapy (1995年に、British Journal of Music Therapy と改称) の始まりである。

設立の目的は音楽療法の普及、発展にあり、音楽療法に関心のある者は誰でも会員になることができる。会員には、音楽療法士、音楽家、医療および準医療関係者、教師、ソーシャルワーカー、両親、学生などさまざまな職業の人たちがいる。2000年から、APMT の会員は、自動的に BSMT の会員となる。³⁾

現在、協会は学会、ワークショップ、委員会を組織し、情報センターでもある。図書目録を発行し、音楽療法と関係の書物も販売している。

1960年代、BSMT の仕事を通して、多くの人々が英国の音楽療法の発展に関わった。音楽家、音楽教師、作業療法士、マッサージ師ほか多くの職業の人たちが音楽を仕事で使い始め、音楽は長期入院の学習障害者や精神病患者のための娯楽というよりはむしろ療法の一環として機能し始めた。特殊教育の分野では、身体的、精神的、情緒的に病んでいる子供たちのリハビリテーションの特別な手段として重要性が認められ始めた。1969年、Music Therapy Charity Ltd. が音楽療法を支援する人々によって結成され、さまざまな所から資金が調達され、音楽療法士の養成、楽器の購入、病人のセンター作り、研究の機会の提供などに役立っている。1980年には、その資金によって、ロンドン・シティ大学に音楽療法に関する最初の大学研究機関 (university research fellowship) が創設された。⁴⁾

次に英国の音楽療法の発展に貢献した重要な人物、J. アルヴァンと二人の先駆者 P. ノードフと C. ロビンスについて、彼等はイギリスの音楽療法にどのように貢献し、実践していったのかを見てもみることにする。

2. アルヴァンとギルドホールスクール

J. アルヴァン (1897—1982) はフランスに生まれ、プロのチェロ奏者として音楽人生を始めた。英国人と結婚し、英国に住み、病院、施設、特殊学校で演奏するようになっていった。

1968年にアルヴァンはロンドンのギルドホールスクールで最初の音楽療法トレーニングコースを開設した。

当時の音楽療法において、レクリエーション的、医学的、教育的モデルの他に、精神分析的モデルが大きな影響力を持ち始めていた。H. タイラーによると、「フロイトの患者に対する画期的なアプローチは、いくつかの際立った様相を示していた。第一は、自由連想 (free association) の使用である。患者は、自分の考えをあるがままにしておくことが要求される。これは、思考をあるがままに辿れば患者は最も重要なことを話すことになる、という仮定が基になっている。第二は、フロイトが、意識上の自我とは切り離して、自我 (エス) または心の意識下の部分が重要だとしている点である。三番目に、フロイトは夢、思考、行動の意味を患者の意識と関連付ける解釈をしたことである。こういった技法が、アナリストと患者の理論的關係の中に入り込んできた¹⁵⁾。

1950年代に精神病院で働いていた音楽家がフロイトの精神分析的アプローチに目覚め、音楽と精神分析心理学とを結びつけようとした。これらの音楽家たちは自らを音楽療法士と呼び始め、音楽療法治療音楽協会の創設会員となり、情報を分かち合い、講義をし、簡単なトレーニングコースを始めた。これが専門の音楽療法士養成コースの先駆けであった。⁶⁾

J. アルヴァンは音楽療法を次のように定義している。「音楽療法とは、身体的、精神的、情緒的失調をもつ成人・児童の治療・復帰・教育・訓練に関する音楽の統制的活用である。音楽療法は、音楽の機能であって、音楽そのものを目的としていない。それゆえ、音楽療法の価値は、使われた音楽の種類にも、音楽的完成度にも関係はない。」⁷⁾ このようにアルヴァンは、音楽の持つ機能性を重視し、身体的、精神的、情緒的障害者の医学的、心理学的治療を行なった。

それは“自由即興”による音楽療法で、「セラピストはクライアントの即興演奏に、いかなる規制も、構成も、テーマも課さないで、むしろクライアントが楽器に自由に向かうように仕向け、調性、リズム、形式にとらわれず、クライアントには自分の順列で音を自由に出させた」⁸⁾。

このようにアルヴァンは、即興演奏を“自由”とし、また即興演奏が彼女の臨床業務の中心そのものであったから、K. ブルーシアはアルヴァンの音楽療法のモデルを「自由即興演奏療法 (Free Improvisation Therapy)」と名づけている。

ブルーシア⁹⁾によると、精神分析的アプローチをとるアルヴァンの「自由即興演奏療法」は、次のように段階を追って計画し、遂行してゆく成長過程を経て行なわれる。

療法のはじめに、セラピストは三つの主たる成長領域のどれかにゴールを決める。知的なものか、身体的なものか、社会感情的なものか。治療はそれぞれのゴールに向けて、三つの段階に分けて進められる。①自己を対象物に関連させる、②自己をセラピストに関連させる、③自己を他者に関連させる、の三段階である。関係性は発達的な成長の機会を与えるものである。従って、アルヴァンは音楽本来の持つ関係性を知的、身体的、社会・情緒的発達の促進に適用している。

このような過程を経て、クライアントは一人の人間 (セラピスト) を信頼し受容することを学習し、以前のこだわり、恐れを捨てたことで、クライアントは家族間や社会的な対人関係の中で起こっている問題を解決することにもっと前向きになれる。そして治療は、クライアントがその最大限の発達能力にふさわしい対人関係を持てるようになったときに終結される。

1976年時点で、ギルドホールスクール他に、もう一つの音楽療法養成コース、ノードフ・ロビンスによる音楽療法コースが存在していた。

3. ノードフ、ロビンスとノードフ・ロビンス音楽療法センター

アルヴァンが音楽療法士の教育をしていた同じ頃、他に二人の先駆者が英国と米国で画期的なことを始めようとしていた。P. ノードフ (1909—76) と C. ロビンス (1925—) である。

1959年、ロビンスが特殊養護児の先生をしていた学校でノードフと出会ってから二人の協力が

始まった。アメリカ人の作曲家、ピアニスト、天性の即興音楽家であるノードフは職員にリサイタルを聴かせるため、その学校を訪れた。その学校、英国のウスターシア州にあるサンフィールド児童施設は、哲学者であるR. シュタイナーの教えを基にしている、全ての人々、どんなに酷い障害者に対してでも、その人生に音楽と他の芸術の持つ重要性和関連性に力点を置いていた。ノードフは、その学校の心理学のH. ギューター博士に頼まれて、その学校で、即興演奏を通して子供たちとの関係を築き、そのことが彼らの状態をどう変えるかを見る実験を始めた。こうして、ノードフと、それに強い関心を持ったロビンスとの共同研究が始まったのである。1959年から1960年にかけて、二人はいろんな障害を持つ子供たちを、個々にあるいはグループで扱った。¹⁰⁾

ノードフとロビンスは英国を去り、アメリカに渡り、1961年2月にはペンシルヴァニアのデブロー校で、精神障害児を対象に研究を行なった。1962年から1967年まではペンシルヴァニア大学にある自閉症児の研究チームの一員として研究を続けた。¹¹⁾

1974年、ノードフとロビンスは英国に戻り、彼等の即興演奏を使った音楽療法を基に、最初のノードフ・ロビンス・トレーニングコースを設立した。このコースは、特に、高度の技量を持つ音楽家を、特殊養護児童相手の音楽療法士に育てることを目指した。のちには大人相手の音楽療法も含むことになった。

彼らの音楽療法は「創造的音楽療法」¹²⁾とよばれる。ノードフとロビンスのアプローチが「創造的」と呼ばれるのは、セラピストが次のような三つのレベルの相互に関連した創造活動を行なうからである。

- ①セラピストは、療法に使う音楽を創り、即興演奏する。
- ②セラピストは、瞬間瞬間にクライアントとの接点を探り、掴み、維持できるように、その即興演奏を創造的に使い、療法体験を「創造」する。
- ③セラピストはまたセッション毎に療法体験を創り、クライアントの創造的進歩を助ける。

このように、セラピストは、個々の療法で使う音楽材料、個々の臨床で使う療法体験と技術、このような体験と技術が繋がってゆく過程を、「創造」するのである。

ノードフとロビンスのアプローチは、音楽は「治療において (in therapy)」ではなく、「治療として (as therapy)」用いられる。

この音楽療法の理論的な背景となっているのは、シュタイナーの「人智学」とマズローのヒューマニスティック心理学である。

創造的音楽療法とシュタイナーの哲学の結びつきを簡単に述べると、ノードフとロビンスの創造的音楽療法においては、人は皆、生まれながらにして「ミュージック・チャイルド」という「音楽的自己」を備えている、としている。それはシュタイナーでいう「アストラル体」のなせる業で、どんなに重い障害に罹っていても損なわれないという前提を基にしている。

もう一つの理論的背景はマズローのヒューマニスティック心理学である。マズロー¹³⁾の心理学によれば、人は自己実現の欲求がある。自己実現をしている人々は、マズローがいわゆる「至高体験」と呼んでいる、まさに、彼らが最善状態にいると感じる瞬間で、個人の生活の中において人間が十分に機能しており、強壮な感じがし、自己に自信を持った状態である。この「至高体験」は心理学的に健康な人々に限って起こるものではないことが明らかになった、としている。

ロビンスは、個人的な成熟への治療目標をこのようなマズローのヒューマニスティックな概念に基づき、正常でない、理屈を超えた存在である、器質的、精神的な障害のある子供たち、それぞれに対し、普遍的な価値のある音楽を経験させることにより、「正常性」よりも「個人の解放と発達」を重視し、生き生きとした新しい自意識を育てていく、のである。¹⁴⁾

現在、英国の音楽療法士の養成コースとしては、ギルドホール音楽演劇大学とノードフ・ロビ

ンス音楽療法センターの他に四つの養成コースがある。これについては第2章で述べる。

4. 職業音楽療法士協会 APMT

1976年に設立されたAPMTは英国音楽療法士の職業組織である。運営資金は会員の会費でまかなわれ、公的機関や民間団体から独立した存在である。1996年の会員名簿による会員数は325名である。¹⁵⁾

APMTの目的は：1) 職業音楽療法士を登録して、英国の音楽療法士の代表機関となる；2) 英国の音楽療法士の給与体系と労働条件を定め、維持する；3) 英国の音楽療法士の権利と地位を守る；4) 英国の音楽療法士の施療基準の維持と守護；5) 会合、会報などを通して、会員間で職業や関連事の情報などを共有し、臨床の実際の議論をするフォーラムを開く；6) 会員の名簿を維持する；7) 会員に定期的に現状を報告する；8) 他国の音楽療法士やその協会と連携し、音楽療法の国際学会に参加できるように資金などの援助をする；9) 英国内の関連する職業や機関と連絡を密にする。¹⁶⁾

このように、APMTの主な目的は自らの職業上の権利と地位を守り、雇用の機会を開発し、会員に情報発信を行なうことにある。

また、APMTは職業音楽療法士にとって、関連する外部機関との、また、会員間の情報交換の場でもあり、会員の有益なサポート機関である。

稲田によると、「英国では、明確な職業理念を持った音楽療法士の組織が世界に先駆けて築かれた。この組織は、音楽療法が準医療専門職としての信頼性を高めることに大きな役割を果たし、音楽療法のさらなる発展に向けて順調に機能している」¹⁷⁾。

APMTが設立され、早急に取り組まねばならない問題はこの職業の成長と発達を認定する職業および報酬基準の構築であった。

5. 職業機構および国家登録

(1) 職業および報酬基準

APMTのキャンペーンの結果、1982年、音楽療法士は近代医療を補足する立場である準医療専門職の一つに位置づけられた。それに伴い、保健社会保障省は、職業および報酬基準(career and pay structure)を構築し、音楽療法士の等級基準と報酬基準を定めた。それは保健社会保障省の公文書NHS (PM82)として成文化され、職業音楽療法士の身分の定義、等級の定義が記された。等級については、実践経験年数、職業における責任の範囲、実践技術の水準に応じて、下位から順に、Senior II, Senior I, Head IV, Head IIIまで定められている。そして、それぞれの等級に伴い報酬基準が定められている。^{18) 19)}

T. ウィグラムによると、「このように医療補助業の枠組みの中で音楽療法士の職制と職階の条項が設けられた。これは音楽療法士が他の医療補助職に比肩する地位を得た上で重要な一里塚である」²⁰⁾。セラピストは雇用されるにあたり、臨床から管理までその枠が広がったことになる。

(2) 国家登録

1989年、保健局は自局に音楽療法に関する顧問を置いた。これに続いて、APMTは音楽療法の国家登録について、医療補助職評議会(Council for Professions Supplementary to Medicine, CPSM)と協議を始めた。1990年、APMTはCPSMと保健社会保障省に、「国家登録の提言」(T. ウィグラムが申請書を作成した)を提出した。この提言が実現すれば、トレーニング、登録、規律、倫理などが法的に整備され、音楽療法の地位も大きく向上する。こういったものはAPMT内部にも存在するが、国家登録とはこれらを法的に確認することである。²¹⁾

1999年、ついに音楽療法士の国家登録が認められた。T. ウィグラムは、国家登録へいたるインタビューで次のように答えている。「この20年間で、我々は、私の知るかぎり、世界に類のない、最も強力な職業的地位を得た。他の国には国家登録に類する制度はない。なにせ、法律が我々の職業を規定しているのだから。」²²⁾

国家登録への移行について、D. スチュワートは「異論があるかもしれないが、それは音楽療法の職業化の歴史で唯一最重要なイベントで、職業として完全に成長したという外部からの‘お墨付き’を得たわけである」²³⁾としている。

II 英国音楽療法の現状と将来

現在、英国の音楽療法士の養成機関としては、第1章で紹介したギルドホール音楽演劇大学とノードフ・ロビンス音楽療法センターの他に四つの養成コースがある。最近の10年間で養成コースが倍に増えたのである。

1. 音楽療法士養成機関

音楽療法士養成機関として、英国には次の六つの養成コースがある。

表1 英国の音楽療法士養成機関 (2001年現在)

養成機関	創設年	募集人員	MA課程	備考
Guildhall School of Music and Drama	1968	8~12	申請中	
Nordoff-Robbins Music Therapy Centre	1974	6~8	有	
Roehampton Institute	1981	8+8(定)	有	定時制併設
Bristol University	1991	14		定時制のみ
Anglia Polytechnic University	1994	15	有	
Welsh College of Music and Drama	1996	7		

英国の音楽療法は、国家認定の職業であり、上記機関の卒業生は国家認定芸術療法士 (State Registered Arts Therapist) として登録される。

これら六つの養成機関の入学資格として次の要件が必要とされる。²⁴⁾

いずれも大学院コースで、高いレベルの音楽性が必要とされ、通常、3年間の音楽トレーニングを経て音楽大学を卒業しているか、総合大学の学位を持っている時のみ入学を許可される。ごく稀には、教育学、心理学といった音楽以外の資格を持ち、かつ高い水準の音楽能力を有する学生の入学が許されることがある。面接では人間的成熟度や仕事への適性も評価される。

入学に際し、全6コースのうち、25歳以上が好ましい、あるいは25歳以上と明記している機関が、ギルドホール、ノードフ・ロビンス、ブリストルの3機関で、年齢を明記しないまでも、ウェールズ大学では人間的成熟度を要求している。音楽療法がクライアントとセラピストの信頼関係があって始めて有効に働くからであろう。

なお、1991年に設立されたブリストル・コースは2年間の定時制で、すでに教育、保健、社会奉仕の分野で働いている音楽家のためのものである。

それぞれのコースでは、1年または2年の養成課程を終了すれば、大学公認の post-graduate diploma が授与される。また、コースによっては、所定の単位をマスターすると修士号が授与される。

各養成機関のカリキュラムと理論的方向性の違いは、音楽療法の多様性の表れであるが、どの

コースも強調しているのは、セラピストの潜在的な音楽性の資質、クライアント・セラピスト関係の重要性、クライアントを取り込むための即興演奏に対する信念である。²⁵⁾

全てのコースは、共通の基本的要素 “Basic Module of Training”²⁶⁾ を満たしている。その内容は以下にわたっている。

1. 音楽療法の理論と実際
2. 療法的ケースワークのスーパービジョン
3. 音楽学習（音楽とその応用）
4. 心理学と心理療法
5. 医学、保健などの関連分野の臨床学習
6. 関連分野の他の職業からのインプット
7. 個人の向上
8. 音楽療法ケースワークの観察および実践

毎年、およそ65人の音楽療法士が養成コースを修了して、新人セラピストとして巣立っていく。さて、音楽療法職の現状はどのようなものであろうか。

2. 英国音楽療法士の現状

英国の音楽療法士の現状について、APMTの理事D. アスブリッジにメールによる質問を行い(2001年6月)、次の解答を得た。

1) 現在、英国に音楽療法士は何人いますか？

約400人(全部がAPMTに属していないので、正確な数は分らないが、資格のある者は約380人いる)。

フルタイムで従事している者 44人

パートタイムで従事している者 308人

2) 現在、音楽療法士はどのような分野で働いていますか？

教育関係—170人

精神保健—133人

犯罪病理—29人

ホスピス—23人

その他——20人

3) 毎年、何人の新しい音楽療法士が養成されますか？

約65人

4) 音楽療法士に対する社会的ニーズはありますか？

音楽療法に対する需要は非常に高い。しかし、残念なことに、多くの施設は財源の不足により、音楽療法士の雇用を制限しなければならないのが現状である。

上記の質問1), 2)に関連して、D. ステュアート²⁷⁾はAPMT会員250人に対するアンケート調査(1997年)で、次の結果を得ている(回答者数126人)。

1) 音楽療法士の年齢と就労状況

年齢構成は、26～35歳の層が最も多く56人(42%)で、平均年齢は36.2歳であった。

経験年数は、1～3年が全体の29%強、10年以上がほぼ31%であった。その間4～9年はぐっと少なく、両端に山があった。

一週あたりの就労日数の平均は3.4日で、4日以上就労者は52%であった。

回答者の42%がパートタイムで、24%が自営、16%が専従者であった。パートタイムで働

く音楽療法士の他の仕事は、器楽の教授、演奏といった一般の音楽分野が圧倒的であった。

D. ステュアートによれば、「週あたりの就労日数と雇用形態を見ると、音楽療法という職業は“発展途上の職業”という様相がはっきりする。平均日数が週あたりたった3.4日で、わずか16%が専従者であったということは、大半が他の職を“定職”以外に持っているということだ」。

2) 音楽療法士の就労分野

音楽療法士が接しているクライアント・グループで一番多いのは、学習障害などの教育分野の43%で、精神保健に関する分野の場合11%である、と報告している。

D. ステュアートの調査結果の詳細を表2に示す。

表2 回答者の働くクライアント・グループ

学習障害	133例
自閉症	43
情緒的行動障害	38
精神保健	34
身体障害	13
コミュニケーション障害	11
犯罪病理	10
老人症	9
不定愁訴	6
ノイローゼ	6
神経病	4
性的虐待	3
飲食障害	1
知覚障害	1

さらに、D. ステュアートは、音楽療法士が将来にわたって健全な仕事を続けていく上に何が必要であるかについて、同調査より次の結果を得ている。

音楽療法の仕事で鍵を握るのは、セラピストの個性—その音楽的個性を含む—である。従って、セラピストをサポートすることは、治療者の精神的健全さや、有効な治療にとって大切なことである。

調査によると、セラピストにとっての二大サポートとは「臨床のスーパービジョン」と「同僚や介護者との交流」であった。「臨床の場におけるスーパーバイザーによる個人指導」が現場の音楽療法士から最高得票を得ており、最近のこの分野における APMT のポリシー(後述)に明確な賛意を示しているということになる。また、「同僚や介護者との交流」について、セラピーに伴うすべての段階で、他の音楽療法士、関係するほかの職業の人々、両親と交流し、関係を構築することは、セラピストにとって健全なサポートネットワークの基になる、と D. ステュアートはコメントしている。

3. 英国音楽療法の新しい動き

(1) スーパービジョン制度と APMT 会員の見直し

APMT は、1995年7月以降に養成機関を修了する者に対して、320時間のスーパーバイザー監督下での臨床業務と、32時間のスーパービジョンを義務づけた。これは1995年から APMT の

「正会員」となるために必要な条件となり、スーパービジョンを完了していない有資格音楽療法士は「暫定会員」として登録されることとなった。これにより、会員の身分は、英国外に職業を持つ「準会員」、養成機関在籍中の「学生会員」、退職した「名誉会員」を含めて5種類に分けられた。また、スーパービジョンは、資格取得後1～3年の間に終了するよう求められている。通常、スーパービジョンは、書類申請および面接によってAPMTが選定した音楽療法士スーパーバイザーが担当するが、他の芸術療法士、精神科医、あるいは心理療法士が行なうこともある。1996年度は34名の音楽療法士スーパーバイザーがAPMTに登録されている。²⁸⁾

(2) 修士課程の創設

音楽療法は、心理学、医学などに関連する学際的な学問でありながら、なお音楽療法という独自の分野でのエキスパートとして発展していかなければならない。T. ウィグラムも言うように、「英国のコースの理念は素晴らしい。しかし、1年で全てを教えることは無理だ。何かを変えなければ駄目である」²⁹⁾。

このような時代が求める科学的アプローチの必要性に迫られて、表1に示したように、次々と修士(MA)課程が創設された。

アングリアポリテクニク大学では1994年、英国で始めて修士課程における音楽療法プログラムを創設した。翌年には、ロンドン・シティ大学がノードフ・ロビンス音楽療法センターとの従来の提携を継続しながら、修士課程を創設した。サリーローハンプトン大学も修士課程を備えており、ヨーク大学と提携しているギルドホール音楽演劇大学は、2001年又は2002年には修士課程を開設予定である(現在認可申請中)。

(3) ミュージックスペースの設立

ミュージックスペースは、音楽療法を中核に、地域に根づいた音楽センターで、健常者、障害者を問わず、地域住民が積極的に音楽に参加できるように、という中心哲学を持つ慈善団体である。³⁰⁾

ミュージックスペース第1号は、1991年、ブリストルに開設された。1994年にノッテングム、1996年にはハンプシャーに、それぞれ第2号、第3号が設立された。³¹⁾

ミュージックスペースは、音楽、学術、教育、ビジネス各界の代表などからなる評議会によって運営される。また熱心なボランティアの人々が運営や基金調達活動に協力している。著名な後援者も名を連ね、このトラストの発展を支援している。³²⁾

4. 音楽療法の将来

英国の音楽療法の未来について、T. ウィグラム³³⁾は次のように述べている。

「イングランドの東南部にセラピストが集中しているのは、職業の発展と協力には結構なことだが、他の地域にももっとセラピストが欲しいとの声が強い。どの音楽療法士も、毎日、業界の大使として活動している。誌紙、特に非音楽療法系の刊行物、の多くの記事が、職業のより広い認知と理解を訴えている。今や音楽療法士は独自の分野でのエキスパートとなり、さらにトレーニングを積み、特殊なクライアントには特定のアプローチを編み出し、将来は、より専門化された優れた療法が育つだろう。」

さらに、「ケアの購入者(保健、社会奉仕、教育界)が、音楽療法の提供するサービスを不可欠なものだと見てくれるようにならなければならない。繁栄させるには、信用と市場性という、二つの重要な要素を考慮しなければならない。信用を増すには、医学界、教育界、雇用者団体の人々が理解し、承認できるような、健全で学術的なトレーニングと施療法を示す必要がある。市場性はとりわけ重要である。雇用の対価を正当化できるだけの“結果の保証”が必要となる。不可避

的に、宣伝の技量も必要である。音楽療法は芸術であると同時に科学でもありうるので、それを心に置いて、音楽療法士は自分の仕事の価値をできるだけ広く捉え、その価値と効能を宣伝できるように、プロセスと結果を測れる物差しを見つけなければならない。」

次に、H. タイラー³⁴⁾によれば、「前向きな進展ばかりでなく、懐疑的な態度をとる者が、まだあちこちにおいて、職業として受け取られるまで、音楽療法は闘い続けなければならない」と油断を許さず、同時に、雇用者からの「効く」というクリニックの有効性の証を求める声が強くなったことを指摘している。

以上のように将来の音楽療法士は、より専門化された療法をめざすようになり、また、クリニックの有効性を科学的に証明する必要に迫られている。

まとめ

第1章では、J. アルヴァンがBSMTを創立してから、音楽療法の国家登録に至るまでの英国の音楽療法の発展を追った。英国の近代音楽療法史の中で、音楽療法士の職業組織であるAPMTの設立と、1999年の音楽療法士の国家登録は、世界に誇れる制度で、英国の音楽療法士にとってとりわけ重要な意味を持っている。

また、英国音楽療法の基礎をなす、アルヴァンとノードフ、ロビンスの音楽療法理論について述べた。二つのアプローチとも即興演奏の重要性を強調している。両者の違いはノードフ、ロビンスが療法は音楽の中で起こり、その中で癒すと主張したのに対し、アルヴァンは音楽を、それ自身が癒すというより、変化を促すツールと見なした点にある。

第2章では、英国の音楽療法士の現状と将来について考察した。

英国の音楽療法士は、六つの大学院コースの養成機関で、毎年およそ65人が育成される。全コース共通に充実した学術的なトレーニング内容で行なわれ、最近の動きとして臨床ケースワークのスーパービジョンが重視されている。

英国においても、音楽療法という職業は、専従者よりパートタイムの従事者が多く、まだ発展途上にある。しかし、音楽療法に対する社会的ニーズは非常に高く、将来の音楽療法職は、各分野に細分化され、専門化された療法として育っていくであろうと思われる。今日の音楽療法士に課されていることは、音楽療法の有効性の証を科学的に証明することである。

(引用文献)

- 1) H. Tyler: The Music Therapy Profession in Modern Britain p.382 *Music as medicine: the history of music therapy since antiquity/edited by P. Horden* Ashgate 2000
- 2) 前掲書 1) p.390
- 3) BSMT Information Booklet, 2000
- 4) T. Wigram, P. Rogers & H. Odell-Miller: Music Therapy in the United Kingdom pp.575-576 *Music Therapy: International Perspectives/edited by C. Maranto* Jeffrey Books 1993
- 5) 前掲書 1) p.382
- 6) 前掲書 1) p.383
- 7) J. アルヴァン著、櫻林仁他訳：音楽療法 p.12 音楽之友社 1998 第19版
- 8) K. Bruscia: Improvisational Models of Music Therapy p.75 Charles C Thomas 1987
- 9) 前掲書 8) p.76, p.91, p.80, p.95
- 10) 前掲書 1) pp.386-387
- 11) P. Nordoff & C. Robbins: Therapy in Music for Handicapped Children p.47, p.37 1992 3rd

impression

- 12) 前掲書 8) p.24, pp.30-31, p.33
- 13) F. ゴーブル著, 水口忠彦訳：マズローの心理学 p.68, p.88, p.89 産能大学出版 1972
- 14) 嶋崎晶子：ロンドンにおける音楽療法の研修報告 p.208 立正大学社会福祉学部紀要 2001
- 15) 稲田雅美：職業組織の設立に見る英国音楽療法の発展 p.88 同志社女子大学学術研究年報 1996
- 16) 前掲書 4) p.576
- 17) 前掲書15) p.87
- 18) 前掲書15) p.95, p.96
- 19) L. Bunt: Music Therapy/An Art Beyond Words p.5 Routledge 1994
- 20) 前掲書 4) p.583
- 21) 前掲書 4) p.584
- 22) Historical Perspectives Interview Series, Tony Wigram p.11 BJMT 2000 (No.1)
- 23) D. Stewart: The State of the UK Music Therapy Profession p.14 BJMT 2000 (No.1)
- 24) A Career in Music Therapy APMT 2000
- 25) 前掲書 4) p.578
- 26) Basic Module of Training, Music Therapy Diploma Courses APMT Courses Liaison Committee 1997
- 27) 前掲書23) p.13
- 28) 前掲書15) p.99
- 29) 前掲書22) p.12
- 30) 前掲書19) p.173
- 31) 前掲書15) p.101
- 32) 前掲書19) p.174
- 33) 前掲書 4) p.598
- 34) 前掲書 1) p.391, p.392